2026年10月4日

公開講演会「医療現場の臨床宗教師」

アンケート集計結果のご報告

日本尊厳死協会 東北支部

【開催概要】

講演会の基本情報

日時・会場

日時：2026年10月4日(日)
13:30 〜 16:45

会場：東北大学 片平さくらホール
（参加費無料・自由参加）

講師・プログラム

第1部 講演：金田 諦晃 氏
座長：井上 彰 教授（東北大病院）

第2部 鼎談：金田氏 × 井上教授 × 伊藤道哉 支部長

【参加実績】

多くの市民・医療者が参加されました

総参加者数

117名

（一般112名＋関係者5名）

アンケート回収

62件

（紙61件＋Web1件）

アンケート回収率

52.9%

（半数以上から回答）

【回答者属性 ①】

会員・一般（非会員）の割合

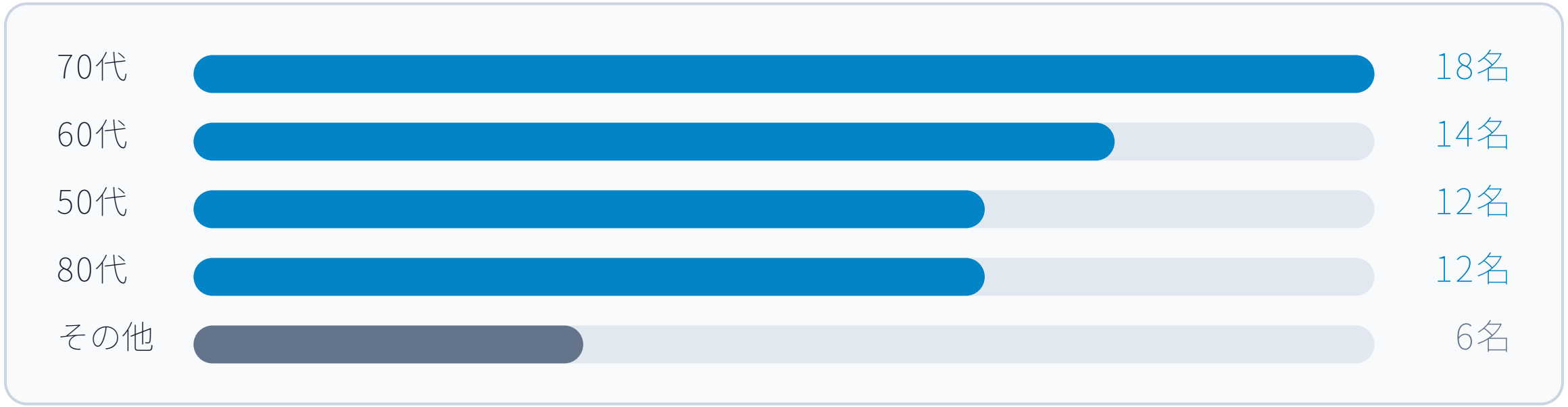
■ 一般の方（非会員） 36名（58%）

■ 尊厳死協会 会員 26名（42%）

会員のみならず、一般の市民・医療関係者が過半数を占めました。

【回答者属性 ②】

参加者の年代分布（50代〜80代中心）



【認知経路】

本講演会を何でお知りになりましたか？



チラシ・新聞・案内

20名

(32%)



協会会報誌

17名

(27%)



知人・Web・その他

25名

(41%)

【参加地域】

どちらからご参加されましたか？

仙台市内

50名

全体の 80.6%

宮城県内（仙台市以外）

4名

宮城県外（広域）

8名

※HP告知で関東からの医療関係者も来場

【全体の評価】

アンケートから得られた主な成果

① 関心の高さ

一般参加者が過半数を超え、地域社会における「生と死・終末期ケア」への関心の高さが実証されました。

② 現場での学び

看護師等の医療従事者から、「言葉を丁寧に聴く姿勢」「解決を急がない対応」に強い共感が寄せられました。

③ 日常の再発見

講話を通じ、「当たり前の日常」「今生きていること」への感謝と尊厳を再確認できたと好評でした。

【参加者の声 ①】

医療・介護の現場からの感想

看護師（40代）

「言葉だけでなく、存在として思いを受け取る姿勢の大切さを学びました。患者さんと誠実に向き合うケアを模索し続けていきます。」

医療関係者（50代）

「単なる問題解決ではなく『分かってほしい』という訴えを受け止めること。『人は人を看取る』という基本姿勢を再認識できました。」

【参加者の声 ②】

一般市民・ご高齢の方々の感想

人生の向き合い方（60代）

「最期の結論に悩み続けるのではなく、今現在の自分自身の人生を思い切り大切に楽しんで生きることが重要だと気づかされました。」

子供たちの作文・寺子屋（80代）

「小学校での生きる・死ぬことに真剣に向き合う取り組みに感銘を受けました。温かい気持ちで今後の人生を歩もうと思えました。」

【第2部 質疑応答 ①】

臨床宗教師の役割と医療・心理職との違い

会場からの質問

・医療職や臨床心理士と、臨床宗教師の役割の違いはどこにあるか？

・無宗教の人や異なる宗派の人に、どのように向き合うのか？

回答・討議のポイント

【治療ではなく共にあること】
医療は診断や治療を目指しますが、臨床宗教師は「答えのない苦しみ」にそのまま共にとどまります。

【布教を行わない傾聴】
自身の宗教観を排し、相手の生きてきた価値観や人間性を尊重して耳を傾けます。

【第2部 質疑応答 ②】

終末期の心境とご家族・対話への支援

会場からの質問

・人は死の間際にどのような心境になるのか？煩悩や執着は残るものか？

・突然の別れではなく、家族と思いを伝え合う対話の支援も必要ではないか？

回答・討議のポイント

【人間らしさを尊重する】

最期まで迷いや執着があるのも人間の自然な姿であり、否定せず受け止めます。

【ご家族への対話の支援】

患者本人だけでなく、見守るご家族の葛藤や聴きたい想いにも丁寧に応えます。

【今後の要望】

次回聴きたいテーマのご要望



尊厳死と安楽死

制度や概念の違いについて詳しく理解したいという要望



うつ病・心の悩み

身近なメンタルヘルスや悩みへの向き合い方・聴き方



供養・お葬式の意義

現代社会における供養や葬儀の役割の再確認

【広報成果】

広報活動の成果と今後の展開

継続的な地域広報の成果

定期的な市民講習会やフライヤー案内の積み重ねが、今回の一般参加者（58%）の参加増に直結しました。

Web発信による広域連携

ホームページでの案内を通じ、県外（関東圏等）からも志を共にする医療従事者の参加を得ることができました。

ご参加・ご回答ありがとうございました

皆様から寄せられた貴重なご意見・ご質問は、
今後の支部活動および次回の講演会企画に活かしてまいります。

日本尊厳死協会 東北支部